

## 柳州紀行

### — 華南の農村景観と貝江苗寨 —

後藤宗俊

#### はじめに

一昨年(平成6年)11月、中国の華南、広西チワン族自治区にある柳州の町で、考古学と人類学にかかる国際シンポジウムが開かれた。別府大学・北京市自然博物館・柳州市人民政府の共催で開かれたこのシンポジウムには、中国側から賈蘭坡、安志敏、周国溝氏ら50余名、日本側からも東京大学・京都大学など各大学から多数の研究者が集まり、11月20日より1週間にわたって研究討議が行なわれた。シンポジウムの主たるテーマは、会場となった柳州市の白蓮洞遺跡にかかわって日中の旧石器・新石器時代の学術研究にあった。その仔細の報告は別になされるはずである。

このシンポジウムのエクスカージョンとして、柳州の西北、融水県の貝江上流にある苗寨のムラを訪ねる機会を得た。以下、その探訪の仔細を中心に、いささか紀行文的報告をしたい。

#### 江畔の水田

11月19日夜9時桂林空港着。生涯ではじめての中国大陸。私は思いがけないかたちでそれを実感した。着陸の寸前に、大きく傾いた搭乗機の窓から、桂林郊外の夜景が見えたのである。夜景といってもそれはただ深い闇のひろがりであった。ところどころかすかに人家の灯りが見えたが、それがかえって闇をいっそう深くするように見えた。かつて見たこともないかぎりなく深く広い闇であった。どこまでが大地でどこからが天空なのかまったく見分けもつかない闇

の中に、ひとつ小さく月が見えた。

翌20日午前中、新石器時代の洞穴遺跡で知られる甌皮岩遺跡、景勝地象鼻山、桂林市人民病院等を見学。桂林といえば奇岩の織り成す璃江下りが有名なのだが、時間の都合でこれは果たせなかった。

午後2時すぎ特急列車で柳州に向かう。列車は40分ほど遅れてやってきた。車両は対面4人掛けの軟座席で快適であった。目的地の柳州までは3時間余り、車窓からの華南の農村景観のうつろいは、事前の楽しみのひとつであったが、車窓が砂塵でひどく汚れていて、車窓からの景観の撮影はほとんど不可能であった。

桂林駅を発ってしばらくは、広々とした水田と畑のひろがりの中に璃江と同じような奇岩の点在する風景がつづいた。奇岩はふいに眼前にそびえたち、そしてたちまち遠景にしりぞく。さまざまなその形態には、一種奇妙な生命感のようなものがあつた。思い思いの姿態でくつろぐ巨象の群れ。そういう印象もあつた。これらの岩山のところどころで石灰岩の採掘が行なわれている。天下の名勝もまじかにみれば、やはりひとつの産業の現場であつた。

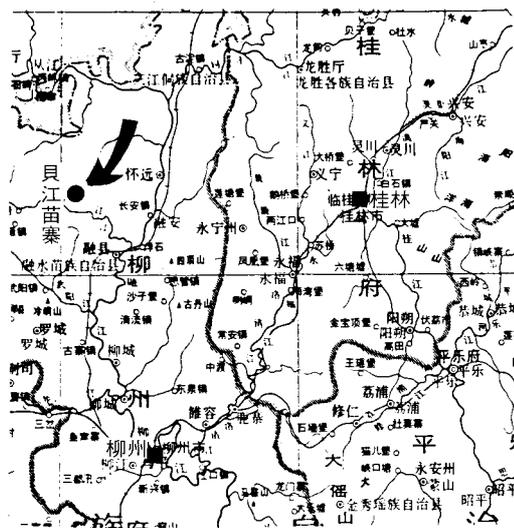
この岩山のつくる奇観については、わたしには東山魁夷が唐招提寺の襖絵に描いた璃江の水墨画の印象が強い。芸術のために神が創造したとしか思えない景観も、地形的にいえば石灰岩の老年期地形の典型であるにすぎない。それが璃江のほりだけに集中するわけではないのであつて、当地に踏み込んでみれば、それは南下す

る列車の車窓に数時間も見え隠れする、まさに大陸的な地形の一部にすぎなかった。

桂林を発って2時間ほど、幽蘭の駅をすぎたところから洛清江の美しい流れがひろがる。この川がはるかにくだって柳江となり珠江に入る。河畔にほとんど人影もなく、時に岸辺に小さな舟の点景。川岸はいわゆる護岸工事の痕跡をほとんどとどめず、赤茶けたロームが剥出して荒々しい印象がある。しかし河流はあくまで澄んで悠々たる流れである。

列車が一刻川辺をはなれ台地に入ると広々とした畑が展開する。そしてまた低地の水田である。この一帯の水田は、みわたすかぎりのひろいひろがりの中に、思いのほか小さく仕切られている。視界いっぱいにはひろがる平野の広さと、それを埋めた水田景観の何とも小規模な畦切り。その広さと狭さのもたらす違和感。

わたしはしばらくして、その意味を納得した。如何なる広大な沖積地でも、悠久の侵食作用をうけて、大小さまざまな起伏のあつまりとなるのだ。要するにその起伏の無数の集合体が平野なのだ。この平野が見かけ上、如何に広大であっても、そこで大がかりな土木工事をやらないかぎり、大きな一枚づくりの田は容易につくれない。そんなことは強権による領主型の開発や、近年の機械力を駆使した圃場整備ででもないかぎりできない。そうした権力や技術がないかぎり、人々はこの平野の微地形にあわせて小さく小さく田を刻み、それをくりかえして耕地を拡大していくしかない。郷里の宇佐や大分平野の、あの広く直線的な水田景観は、長い間、大小の基盤整備をくりかえすことによって出来上がった実に実に人工的な景観なのだ。その下には、かつてこのような原初的な水田の積み重ねがあったにちがいない。わたしは仲間たちと、発掘の現場でしばしば口にした「原地形」「旧地形



あるいは「旧水田面」というようなことばを思いだしていた。

列車は対亭を通過。車中で買った棗のレーズン風のもの、西瓜の種、干肉をつまむ。

車窓まじかに少数民族のものらしいレンガづくりの農家。板壁でかこわれた家畜小屋。水牛に乗った少年と少女。一面のさとうきび畑。芭蕉の木、そしてユーカリ。にわかに亜熱帯らしい景観となる。

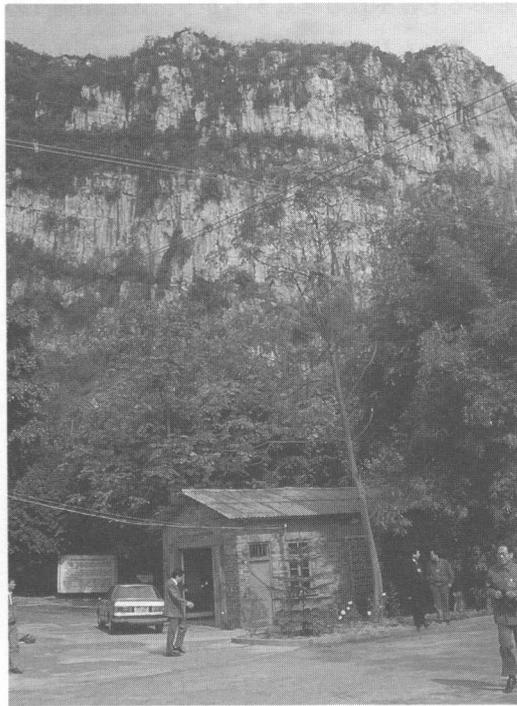
午後6時柳州についた。晩秋の柳州の町はも

うすっかり暮れていた。車窓からの市街の様相は一見して工業都市の印象である。この町については、その治安などについてあまりいい話を聞いていなかったの、いささか不安のつきまとう到着であったが、ホームには大勢の関係者や報道陣が詰めかけ、思いがけない賑やかさに安堵した。

ホテルの柳州飯店に入る。賈蘭坡、安志敏、周国溝氏らの歓迎を受ける。大会登録のあと歓迎レセプション。いきなり停電があった。



柳州郊外寸景



白蓮洞

21日よりシンポジウムがはじまった。会場は白蓮洞博物館である。白蓮洞は博物館のすぐ裏の石灰岩の岩山にある。毎朝6時半起床、7時朝食、7時30分宿舎発、8時より開会という日程であった。宿舎の柳州飯店から会場へは車で20分ほど。毎朝専用のマイクロバスで公安当局の先導をうけながら走る。昼食は、また会場から10分ほど車で走ったところ、柳江の小さい支流沿いの度暇村魚餐館という店とする。魚料理を中心とした民族料理であった。館のまわりには、美しい河流を取り囲むようにあの奇岩が並んでいる。

21日は、午前中シンポジウム運営についての日中代表者の打ち合せ。午後日本人研究者だけ周教授の案内で白蓮洞を見学。夜歓迎レセプション。

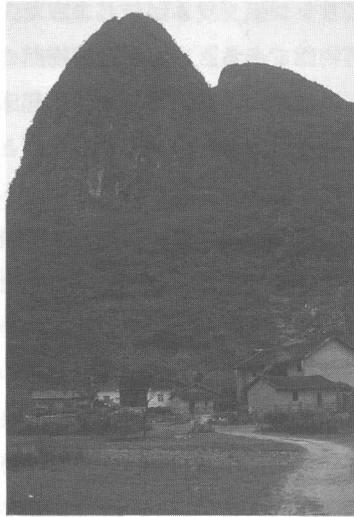
22日終日シンポジウム。午後大龍潭民族公園にある洞穴遺跡を見学、夕食は民族料理。苗族の人たちの歓迎をうける。二人の盛装した少女が、歌をうたいながら、テーブルをまわりゲストの耳をつまんで強い酒をのませる。

23日午後柳江人洞を見学。遺跡は会場より車で20分ほど北に走った畑地帯にある。遺跡の近くでバスを下りて歩く。サトウキビやキャッサバの畑のあいだの高原風の野道である。まわりはここも巨岩の遠景。遺跡見学の後、同じ通を歩いてバスまでもどる。同行した若い中国の女性記者のひとりが、道端の草叢に手をのばして、南天らしい赤い実のついた小枝をとって大事そうにバッグにおさめている。婦人の手もとの南天の紅は、実にあざやかで、しかし如何にも頼りなげな小さな粒であった。

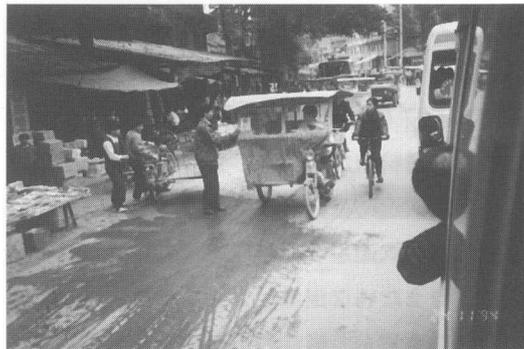
#### 貝江苗寨

24日。少数民族苗族の現地踏査。

目的地の貝江苗寨までは、はじめ車で3時間



柳州郊外の奇岩と農家



隔水県都の通り

と聞いていた。しかし何かしらこころもとない。しっかりと確かめると4時間かかるかも知れないという。それがやがて5時間になり、出発の前日には、ついに急いでも片道6時間の難路ということとなった。22日から23日夜にかけて医師による参加者全員の健康診断があった。

24日、宿舎を早朝六時に発った。車は前日までのマイクロバスが2台、それに年配の研究者のために特別に配備されたリクライニングシートバスが2台。(このうちわたしたちの乗った車は出発後まもなく故障して、前後の車に分乗した)。日本からの研究者とともに安志敏、周国溝氏ら中国側の研究者たちも乗り込んだ。安教授も苗寨ははじめてという。医師二人が同行す

る。朝昼二食分の弁当が配られた。ソーセージ2本と饅頭、それにミネラルウォーター1本。

早朝の柳州市街。パトカーに先導されながら市街地を北へ走る。まだ市内はラッシュ前のはずだが、郊外へ向かう我々のバスの脇を、自転車の人たちがつぎつぎに走りぬける。道端では店の表の戸をあける人。朝餉の火を起こす人。

30分ほど走るとようやく農村地帯にはいる。途中桂林と同じような石灰岩地形の奇観がくりかえし現われる。まだ朝は明けきっていないから、薄闇の中に巨大な石灰岩の岩山が、さまざま形をかえ現われては消える。すぐ手前には水田。そこだけが日本的な空間である。一行は車窓の景色をみつめるだけで言葉もない。隣席の鈴木重治教授(同志社大)が「夢をみてるようですね」とつぶやいた。

水田の背後に一面のサトウキビ畑がひろがる。水田の景観は、それ自体日本のあちこちでみかけるものとかわりないのだが、よく注意してみると、やはりどこがちがう。どこが違うのか。それもしばらく経って得心した。ほとんどの水田の畦や土手に石垣がつかわれていないのだ。つまり土のままの仕上げなのである。土のままの棚田には景観上独特の印象がある。石垣を組んだそれと違って、土手を垂直に高く作れないから、ひとつひとつの田のレベル差が小さいのである。その分、水田一枚の区分も小さく狭くならざるをえない。

石垣のない棚田。わたしは大分県の国東半島の荘園村落調査の報告を思い出した。

国東半島では、本格的な石垣による棚田が出現するのは江戸時代中期以降である。荘園村落調査の成果によれば、それ以前、さらに中世に遡って、この半島に営々と棚田が営まれたことは確かなのだが、そこではまだ石垣を重用することはなかった。棚田の土手はただ土を削り叩



貝江のわたし場



苗族のムラ遠望

いて整えたものであったと考えられている。現状の水田の石垣部分を発掘すれば、そうした古い棚田の遺構が検出できるのではないか。そういうふうに考えていたのである。今中国の柳州郊外に展開する水田は、かつて江戸時代の中期以前に国東にも展開した古い水田ではないのか。

やがてまた河畔に出る。雄大な流れ。ここでも河畔に堤防らしい堤防はない。川岸は緑の草木におおわれ、ところどころ崩れて赤土がのぞいている。

出発後二時間ほどして融水に着いた。ここまでは快適なドライブであったが、融水をすぎて状況は一変した。車は急峻な山道をあえぐように登る。猛烈な砂塵が舞い上がる。窓を締めていても砂塵は容赦なく車内に忍びこむ。一同タオルを口にあてて言葉もない。車は悪路に何度も腹を打つ。その衝撃も半端ではないのだが、運転手はかまわず前進するのである。

融水を過ぎて30分ほどして、ようやく眼下に貝江の流れが広がる。車窓から覗き込むが急峻な崖道には路肩らしい路肩もない。深い谷、清冽な河流、驚嘆の思いと背中あわせに恐怖感が走る。やがて対岸の傾斜地に張りつくように、ひとかたまりの集落が見えた。「苗族の村ですね」と通訳の人がいう。苗族の村は山間の斜面

や谷間に、文字通り一点景として忽然とあらわれ、たちまち深い緑の海に消える。そうした景観の繰りかえしの中で、四時間ほども走ってようやく目的地に着いた。村は蛇行した貝江の流れに突き出した小さな丘陵上にあった。広西チウワン族自治区融水苗族自治县安泰郷江竹村白竹屯、それが正確な名称である。人口500余人、戸数約80戸という。

#### 蘆笙を吹く広場

難路6時間、ようようの思いで到着したのだが、なかなか村には入れない。村の入り口で柳州から同行した市の関係者と村の長老らしい人が話し合っている。いつもこうなのだという。10分ほどしてようやく村にはいる。村の中央に広場がある。カーニンと呼ばれている。5000平方メートルもあろうか。苗族の村人たちが大勢で私たちを歓迎してくれた。まず竹でつくった杯で歓迎の酒杯をうける。広場にあつまった男性の多くは黒い服を着ている。この地域の苗族特有の服装という。広場では数人の青年たちが笛を吹いている。竹でつくったもので蘆笙（カー）という。広場をカーニンというのも蘆笙を吹く広場（ニン）という意味であるらしい。蘆笙は神からの授かりものといい、融水の苗族は何かにつけこの蘆笙を吹く。鈴木正崇氏によれ

ば、苗族が蘆笙を吹くのは旧暦六月はじめの新嘗のまつりの日から正月（春節）までという。正月をすぎると田おこしがはじまり本格的な農繁期に入る。この頃から稲が穂をつける六月までは蘆笙、つまり歌舞音色を謹むのである。

青年たちの吹く蘆笙の単調なサウンドにあわせて、盛装した苗族の少女たちが、輪になって小さくステップを踏む。この地方には若い男女が歌を交わして恋の思いを伝える風習が今もある。いわゆる歌垣である。この歌垣でも男性は蘆笙をふき女性はステップを踏んで踊るといふ。

広場の真中に一本の柱が立っている。一見してトーテムとわかる。貝江の苗族ではこれをトンカーという。トンには柱、カーは蘆笙のことである。柱の頂には木彫りの鳥がとまっている。苗族の民話伝承には苗族はもと蝶であったといい、この蝶の卵を孵化させてくれた始祖鳥の伝説が語り継がれているという。この木彫りの鳥の下、柱の中ほどには水牛の角を象った突起がある。そして柱に巻き付く竜の絵が描かれている。水牛はいうまでもなく農業に欠かせない財産である。このトンカーには水牛を竜の化身とする信仰がこめられている。鈴木氏によれば、この柱には楓黄樹という木が使われるが、この木は苗族の村にとって宇宙創始から授けられた神聖な木であるという。この楓黄樹も村の背後の山に多く自生し、家などの部材として重宝される木であるらしい。

鶏となって村人の暮らしをささえる山鳥、竜の化身としての水牛、そして村の造営に欠かせない樹木、要するにトンカーには、そうした現実上の貴重な生活資源と財産を、すべて天や山からの自然の神の恵みとして受け取る信仰がこめられているようである。

それだけではない。このトンカーには村と部

族の始原の説話が表象されている。村の生活と文化はすべてこのトンカーはじまり、そしてトンカーに収斂する。正月の春節、六月の新嘗の祭りもここで行なわれる。春節にはモウコウ（春の神）やマンガオ（山の神）が村を訪れるまつりがある。モウコウやマンガオは奥深い山や遠い異境からやってきて、時に災いをもたらし、時に恵みをもたらすという。奥深い山間に孤立して営まれる村と村人にとって、周辺の異境との接触や往来の吉凶は、村の存立にかかわる大事なのであろう。これらモウコウやマンガオも、トンカーの下にやってきて舞い踊り、そして去っていくという。

私たちが村についてまもなく結婚式がはじまった。新郎16才、新婦15才という。式の次第はけたたましい爆竹の中で、すべてトンカーのまわりで行なわれた。式の終始、蘆笙が鳴りつづけたのはいうまでもない。この若い新しいカップルのために、別府大学から博多人形が贈られた。それは一刻村中の人たちの感動を呼んだらしかった。老若男女、白無垢の人形のケースに寄ってきて覗き込んでいる。人々それぞれの、いかにもこの地の民族らしい風情と表情に包まれて、今一個の博多人形は、痛々しいほどにも繊細で清楚に見えた。

### 高床の家

村の中央広場（カーニン）のまわりには、丸木柱の家が密集して建っている。そのほとんどは高床の建物である。それは私にとって夢のような光景であった。近年、日本の先史時代の高床建物のルーツの問題ともかかわって、中国の雲南や貴州、あるいはインドシナ半島などの少数民族の高床建物について、数多くの調査がなされ報告書の類も刊行されている。しかし目の前の建物は、そのどれよりも日本的で、そして



安泰郷白竹屯の村はずれ



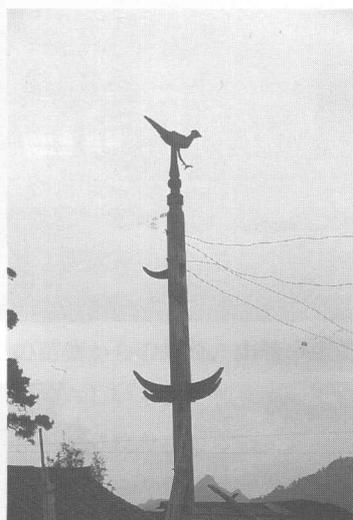
高床のテラスと広場



トンカーのある広場

弥生時代のそれに似て見えたのである。

これらの高床建物の多くは、杉の丸木の通し柱構造で、平面は一間×二間、あるいは二間×三間の小ぶりな家である。柱は一部は地面に深く挿入して掘立柱としているが、石の礎盤の上に乗せただけの柱も併用している。この構造は弥生時代や古墳時代の掘立柱建物を発掘する上で大いに参考になった。わたしたちの発掘現場



トンカー

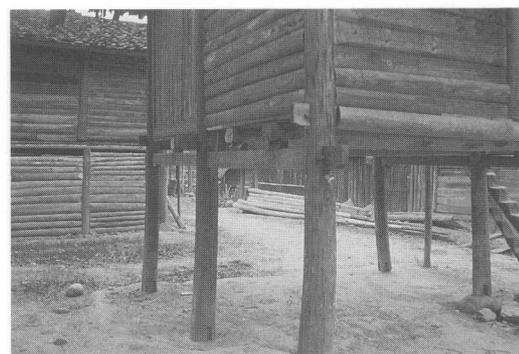
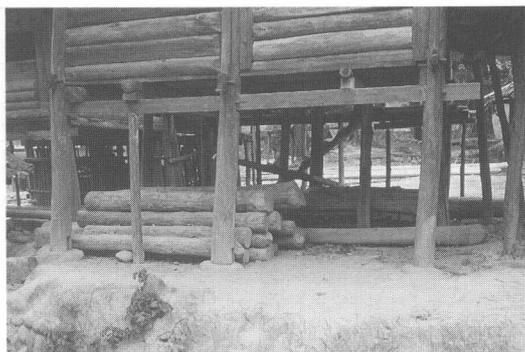


苗族の人々



苗族の新郎新婦

では、しばしば掘立柱建物に出会う。この場合桁行、梁間を確認し、建物を構成する柱跡を確認して発掘するのだが、どんなに注意して土を



白竹屯の高床の家

観察しても、どうしても何本かの柱穴が見つからないことがある。そういう場合、発掘の不手際で片付けるか、現実には建てられなかったと判断したりしているのである。しかしこうした判断は誤っている。この苗族の高床でみるかぎり、柱のすべてを掘立柱とする必要はないのだ。これで十分安定しているわけは、床受けと軒桁の下に、いわゆる貫（ぬき）の部材をかませているからであろう。

屋根はまれに形ばかりの瓦を置いているが、多くは杉や檜の皮を葺いたものである。このような建物がこの地方でいつ成立したものかは知らない。歴史の時間軸を無視した不用意な比較はつしまなければならぬが、確かなことは、これだけの技術は、日本では弥生時代、つまり稲作農耕社会のはじまりの時代に、基本的にはすでに達成されていたということである。そうした立場でみると、弥生時代の高床建築の研究という面でも参考となることは実に多い。たとえば湿気の心配のない高い台地上であるにもかかわらず、ほとんどを高床としていること。高床＝湿気対策という先入観のようなものがわたしにはあった。ここではそれは第一義の理由ではない。床下部分は倉庫、家畜や鶏などの飼育、干草や薪の保管など実に多目的に利用されている。柱は径15センチほど、日本の杉材でいえば20年生ほどのものである。これだと角材の柱材はとれないが、丸木のままで丁度手ごろな太さなのである。のみならず、このくらいの丸木部材だと高床の柱に丁度いい長さになる。細い部分は垂木などに使う。建物のまわりには多くの予備の柱部材が置かれていた。部材がいたればすぐにとりかえるのであろう。

人々の起居はすべて床上でなされている。炉や竈も床上に作り付けられている。床に粘土を張り石で囲って炉にしている。作り付けの竈を

持つ家もあった。ちょうど建築にかかったばかりの家も見したが、まず堅穴住居跡のような堅穴を掘り、その上に建築しようとしていることも興味深いことであった。狭い集落用地の効果的な利用、小さい建物でより多くの部屋空間を確保すること、建築部材としての柱材の有効利用、いずれにせよ高床建物は、ここでは実に合理的な建築様式だと納得できたのであった。

なおこの苗寨からの帰路、山峡の道筋で、しばしば杉や檜らしい木材を切り出している現場を見た。切り出された木材はいずれも径15センチ前後、丸木のままで枝をおとし、皮もきれいに剥いで古びたトラックにつみこんでいた。それは苗寨で高床建物のそばに備蓄されていたものと同じような木材であった。切りだす木材の量もいかにも微量であった。車窓から見える山の斜面にときどき杉や檜の造林らしい箇所をみかけた。そうした人工林は、鬱蒼たる広葉樹の森の、ごく一部に点々とあるのみであった。こういうところから半ば自給自足的に切り出すのであろう。角材の柱を切り出せるような木材はついにみかけなかったし、道中製材工場のようなものもなかった。

#### 歴史と世界観

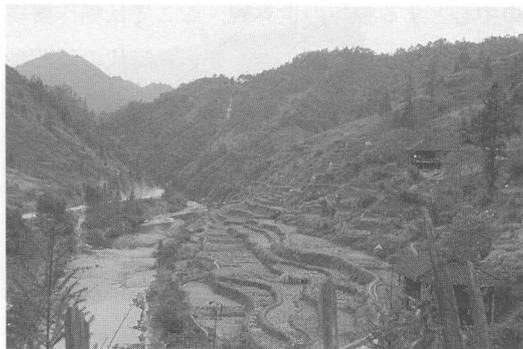
トンカーという名のトーテム、弥生のイエシナながらの高床建物、山間の小天地を宇宙・自然の中心とする独特の世界観、ここでは稲作農耕の歴史にかかわって、さまざまな時代の時間軸が交差しているようである。どうしてこのような文化が残され蓄積されたのであろうか。

周知のように苗族は中国華南からインドシナ半島にかけて住む少数民族である。1989年の統計によれば、広西の融水苗族自治县は苗族の本拠地のひとつで17万人の苗族が住む。これらの苗族がいつからここに住み着いたか明らかでな

いが、約五百年前、明代末期に貴州から移住したとの伝承を持つという。

村松一弥氏によれば苗族の名は古く『書経』『舜典』に「三苗」が見え「南蛮」の祖とされる。以後「南蛮」の内語りつがれるが、苗族の字は宋・元代以後に用いられたという。明の時代以降、とりわけ清朝の時代にはきびしい弾圧と圧迫を受けた。1945年の開放後各地に自治州、自治県をつくったのである。苗族は、こうした長い歴史をもっているが、この歴史をとおして、彼ら自身の統一国家をつくることはついになかった。統一国家がつくられれば、多くの場合、村や地域の始原の説話は国家によって再編成され統合される。そこでは「地域」が世界の「中央」であるという説話は生き残れない。苗族は歴代中国の王朝や国家の支配や搾取を受けたが、その下にあっても、多くの部族は山間の奥地に拠り、時代の国家体制に完全に組み込まれることなく、独自の社会と文化を維持しつづけた。苗族の多くの部族が、今なおそれぞれの村に、宇宙の創始、天地の始原にはじまる村の草創の説話を持ち、その象徴としてニン（広場）を設けトン（柱）を建てるのも、こうした歴史をふまえてのことなのであろう。

短い時間に追われるように村のはずれに出てみると、貝江の深い谷にそって見事な棚田がみ



貝江沿いの水田

えた。この地域の苗族の人々は、このような斜面や谷間に田畑をつくり米（とくにもち米が多い）や粟やとうもろこしを植え、鶏や豚を飼い、猟や川の漁をして生活している。棚田の畦畔はほとんど土手で、石垣は下の方で一部築かれているだけである。柳州郊外で見た棚田がさらに美しい姿で展開していた。そうした棚田と並んで山の斜面を入念に耕した畑が見えた。相当な急斜面だから、いわば畑をそのまま立てておいたように見える。

わたしの思いは再び大分県の国東半島に翔ぶ。豊後高田市の田染地区のいわゆる田染荘の調査では、田染各村の元禄年間の絵図とこれに付記された村明細帳が大きな役割を果たした。この絵図の中に、明らかに山の斜面と思われるところに「畑」の図がいくつも記されていた。しかし現地の雑木林に踏み込んで、それらしい棚畑の痕跡はない。しかしその表記形態と面積からして焼畑とも思えない。斜面を利用してこれを丁寧に耕作する畑。どうやらそういうものであるらしかった。それは今中国華南の苗族の畑にこのようにして現存するのであった。そ



の周辺には、いわゆる焼畑らしい空間も見えた。

### 変容の兆し

狭い谷あい天まで登るような棚田。それはわが国でも馴染み深い景観なのだが、わが国の棚田の多くは、このごろ、このように隅々まで耕作されていない。高度経済成長の下での過疎と減反政策などによって、耕作がおこなわれなくなり荒廃が進んでいるからである。これら山村の農家の後継者の問題を考えれば、わが国では、これらの棚田のほとんどは、早晚視界から消え去り、雑木の林に飲み込まれる運命にあるのである。

中国華南の奥深い山地にも、いずれこういう時節がやってくるのであろうか。1984年には、この地域の人々が神の峯と仰ぐ元宝山周辺が旅遊区開発区に指定され、融水の町には日中合弁の観光会社が設立されたという。今回の踏査の途中でも貝江をわたる鉄橋の工事が進められていた。

苗族のムラは3時すぎに発ち帰路についた。まだまだ見聞したい多くのことがあった。何よりも耕作用具、工具、日常の什器、土器づくり、そして墓地と葬送儀礼。しかも下山しなければならぬ。村中の人々が思い思いのしぐさで歓送してくれた。

融水県都までの2時間に及ぶ行程は、またしても猛烈な砂塵の中にはじまった。後方をふりかえると、急峻な山稜の中腹に、長い砂塵の線ができていく。その白い線が過ぎてきた道路の唯一とつのはあかしであった。車中で配られたパンプを見る。貝江の苗寨探訪をメインとした観光パンプである。そこには「貝江苗寨族遊一泊二日、交通方便の地！」という活字が踊っていた。

夕刻7時ちかく、ようやく融水につく。県都

は砂塵の中に暮れていた。この町の寿院餐厅であわただしい夕食をとる。

8時前融水発。柳州に向かう。外はもう闇。闇の中を白楊樹の白く細い並木が走りぬける。背景にまたしても巨岩のシルエット。満天の星。ところどころ人家の灯り。それらがつきつぎに走り去る。車中の人々はほとんど眠っている。前の席の同行の少女二人が運転手の青年に話かけている。彼女たちも長旅の疲れか、苗寨見学の間感銘のためか、気分が昂揚しているようであった。運転手は、もうかれこれ10時間以上運転している。少女たちとの会話はいい目覚ましになるのだろう。若者たちの意味のとれない会話はとめどなくつづいている。

ともかくもう二度来ることはないところに来た。もう二度会うこともないだろう人々に会ってきた。そういう思いが強い。

10時30分。ホテルに着く。顔を洗うと洗面器の水が薄茶色になった。

### 余滴・柳州の秋雨

柳州での最初の夜、歓迎のパーティを終えてホテルの部屋に入って、窓から柳州の夜景を見た。中国の都市の夜景は、日本のその過剰なほどの明るさに慣らされた目にはとかく暗く感じるものだが、ホテル周辺は街の中心だけあってさすがに明るい。すぐ近くに柳侯公園がひろがる。ここには柳宗元の廟がある。この晩唐の悲運の詩人の廟を訪ねることは、私のひそかな楽しみであった。それは今眼下の夜景の中にある。「唐詩三百首詳解」の柳宗元の条のコピーを取り出して読む。

唐宋八大家のひとりとして知られる柳宗元は山西省永済県の人。貞元九年（七九三）進士に合格。以後政治家としても順風に乗って出世する。皇太子李誦（順宗）の下で王叔文らの改革

に参加。貞元21年(805)順宗即位により礼文員外郎に任ぜられた。しかし急速な改革に反発した宦官らの策謀によって、わずか七ヶ月で順宗が退位、かわって憲宗が即位すると、詩人の運命は暗転する。元和10年(815)、永州(湖南省雲陵県)の遷地から一旦は許されて長安に召喚されたが、ほどなく永州よりさらに遠地のこの柳州に左遷され、元和14年、47才でこの地に没した。

清冽な詩情とあり余る感性。幼少より知られた学才。そして誰よりも情誼厚い人柄。どう見ても官界をわたり政治抗争の渦中を生きぬくにふさわしい人ではない。にもかかわらず彼は終生、時代の行政・政治の状況にコミットしつづけ、闘い、そして敗れた。柳宗元が、柳州刺史として赴任した時、柳城の高樓に登って詠んだ詩。

城上高樓接大荒  
海天愁思正茫茫  
驚風亂颭芙蓉水  
蜜雨斜侵薜荔牆  
嶺樹重遮千里目  
江流曲似九迴腸  
共來百粵文身地  
猶自音書滯一鄉

詩人は柳江河畔の高樓から、はるか大荒(大地の果て)につらなる遷地の風景を前にして、いわれない罪科によって左遷された、その悲涼痛憤の思いを、同じ運命に遭遇した四人の友に語りかけている。編者田部井文雄氏の語釈をひきながら、詩人の心象を私流に読み下してみる。「柳城の高樓は地の果て(大荒)に接している。極遠の地(海天)での深い愁思は正に茫茫とつきない。吹き荒ぶ驚風は芙蓉の水を乱し颭(そよ)がし、降りしきる蜜雨は薜荔(つたかずら)

の牆(かき)をたたっている。はるかに長安を遠望しようとしても、樹林が重なって千里の目を遮ってしまう。蛇行反転する柳江の流れは、わが九廻の腸に似ている。今、私は敬愛する友と同じように、流されて南越の百粵文身の地にたたずんでいる。一片の音書を君たちに寄せたいが、それは遷地の一郷に滞ってとうてい届かない。」

詩人が詠んでいるように柳江はこの柳州の市街で大きく反転蛇行する。〈江流曲がりて九廻の腸に似たり〉。詩人は、その柳江の蛇行を自らの無念断腸の思いに例える。

それにしても〈愁思茫茫〉といい〈九廻の腸〉という。詩人の内腑を九廻させる茫々の思いとは何か。腸九転という言葉にその思いがこめられていようが、その仔細について詩人は何も語っていない。この他の詩の中でもそうなのである。

人は言葉によって自らの心象や情念を語り表現する。しかし人には、それについて一切を語らぬことによってしか、あるいは語ることを断念することによってしか表現できない心象や情念というものがある。そういうとき詩人は、すべての心象や情念をその内腑に飲込み、ただその網膜に映った眼前の風景や事物を、そこにそのように見えたものとしてだけ叙する。

〈驚風亂し颭す芙蓉の水、蜜雨斜に侵す薜荔の牆、嶺樹重なりて千里の目を遮る〉。

私には、ただ遷地の風雨樹林を叙したこの三句にこそ、茫々たる〈愁思〉のすべてがいろいろくされているように思われる。この下りに、詩人の心象を叙した字句は一片もなく、ただ叙景の字句が並ぶのみなのだが。

柳宗元には、もうひとつ特によく知られた詩がある。

千山鳥飛絶(千山鳥飛ぶこと絶え)

萬徑人蹤滅（萬徑人蹤滅す）  
 孤舟蓑笠翁（孤舟蓑笠の翁）  
 獨釣寒江雪（獨り釣る寒江雪）

この詩は柳州で詠まれたものではない。貞元21年（805）、柳宗元は永州に左遷された。時に33才。以後10年この地で過ごした。この江雪の詩は、この間に詠まれたものという。高雅、孤高、孤独、脱俗、枯淡。この詩には実に多くの評言が添えられた。

見渡すかぎりの雪景色の中で、ひとり釣る蓑笠の老人。およそ世俗の臭いをすべて削ぎ落とした世界。たしかにこの絶唱にはそうした形容が似合うのかもしれない。

<千山鳥飛ぶこと絶え 萬徑人蹤滅す>。特にこのはじめの二句は、雪という言葉を全く用いずに、万物雪にとざされた静寂の世界を表現したものとして、修辞の面でも高く評価されているくだけである。だが雪に閉ざされたのはただ千山萬徑の自然のみではない。この雪景の中に、遷地での詩人のすべての心情や情念もまた閉じこめられている。官人としての確執、葛藤、闘い、敗北、悲涼痛憤、気負いと怯懦。それらのものは特に深く深く閉じこめられている。だから思う。この詩が何が高雅であり孤高であろうか。脱俗であり枯淡であろうか。語れた世界はたしかに雪に閉ざされて凍結しているが、その雪の肌は、なにか詩人の名状しがたい情念をのみこんで、ほとんどふるえているようにみえるのである。私はあらためて、このすぐれた詩

人が、実に生々しい肉体をもった公人であったことの意味を知る。そして、その公人としての挫折と敗北なしには、彼の偉大な詩業もなかったことを思う。そしていかなる冤罪や策謀や弾圧によっても、ついに奪われることのなかった彼の天りんを知る。その天りんによって千二百年の後、異国の一旅行者をとらえてやまないのである。

雨が降りはじめた。ひとときわが思いにたちかえる。詩人の片句を借りて、いささか羈旅の感慨を記してみる。

柳城の夜景 愁思茫々 羈旅の秋雨 我を愁殺す。

26日、シンポジウムの全日程が終わり、自由時間を得て工藤茂先生とホテルの近くの柳侯公園に柳宗元廟を訪ねた。ほとんど人影もなく、森閑とした廟内に、私たちの忍び足の音だけが聞こえた。廟内の売店で、柳宗元の話にちなむ木製の小さな棺の民芸品を買って廟を辞した。

#### 参考文献

- 宮家準・鈴木正崇「東アジアのシャーマニズムと民俗」・1994  
 「苗族民話集」（東洋文庫・中国の口承文芸2）・1974  
 村松一弥「中国の少数民族」・1973  
 田部井文雄「唐詩三百首詳解」下巻・1990